29【P2】Ⅱ-305

共立薬科大学における統合型医療系実習の実施と評価

○小林 典子[1], 木津 純子[1]([1]共立薬大)

【目的】医療薬学教育の充実が叫ばれる中、共立薬科大学は平成15年度より、新たに統合型カリキュラムによる医療系実習を実施した。教員による評価とともに、実習後にアンケート調査を実施し、学生による実習評価を行ったので報告する。
【方法】3 年生後期 200 名の学生を対象に、約 2 ヶ月間にわたり医療系基礎実習(製剤、TDM、放射実習)と医療系実務実習(医薬品情報、調剤・服薬指導、SP による服薬指導、注射剤調剤、保険請求、附属薬局における実習)を、25 名～50 名単位で行った。さらに、14～15 名単位の小グループディスカッション(SGD)形式による症例検討を実施した。本実習には 8 講座および医療薬学センターから計 22 名の教員が参加し、教員による学生評価及び試験を実施した。さらに、基礎実習および実務実習終了時点で実習項目毎に 4 段階評価によるアンケート調査を実施した。
【結果】本実習に対し、学生は積極的に取組、教員による学生評価も概ね良好であったが、教員の負担増、全項目内容を把握する必要性等の問題点も挙げられた。200 名の学生から回答が得られ、全ての実習項目において、①積極的な取組、②教材の評価、③教員に対する評価、④将来的な有用性、⑤総合評価に対し「非常に良い」「やや良い」という評価が得られた。④については、製剤、調剤・服薬指導、SP、附属薬局実習、症例検討において「非常に良い」と答えた学生が最も多かった。
【考察】統合型実習にすることにより、実習全体の関連性・連続性が得られるとともに、各項目に実践的な実習を導入することにより、学生の意識が高まり、基本的知識・技能の向上につながった。また、SP の導入や附属薬局における服薬指導の実践、SGD などにより態度教育も可能となった。今後、今年度挙げられた問題点を解決し、さらに効率的・効果的な実習に改良していく必要がある。